

# 「NABShow 2018」レポート(1)



神谷 直亮

全米放送事業者協会（NAB）が主催した「2018 NAB ショー」が、4月9日から12日まで、ミネバダ州のラスベガスコンベンションセンター（LVCC）で開催された。先月号で概要を速報したが、本稿では、ゴードン・スミス NAB 会長の開幕講演、中央ホールの日本回廊を埋めた日本メーカーの展示内容、南上層ホールに集結した衛星通信・衛星放送事業者についてレポートする。

開幕セレモニーの会場がウエストゲートホテルのボールルームから LVCC 北ホールのメインステージに変更され、格下げになったという印象が否めなかったが、スミス会長の講演内容は、自信とビジョンに満ちたものであった。同会長は、まず、NAB の実績として、「全米の放送事業者に対して FCC（連邦通信委員会）が、ウルトラ HD テレビ放送、インタラクティブ機能の提供、カスタマイズが可能なコンテンツの配信を約束する次世代放送サービス（ATSC3.0）の自発的な事業展開を認めたこと」を挙げ



写真1 スミス NAB 会長は、NAB の実績を強調し、将来のビジョンを語った。

た。次いで、「放送の将来ビジョンは何か」と問いかけ、回答として「長期的な成長をもたらすイノベーションへの投資と視聴者のメディア消費に対する変化への絶えざる対応」を取り上げた。具体的なビジョンとしては、「FM ラジオのオール・デジタル化」「視聴者が求めるコンテンツへのアクセス向上を約束する次世代 ATSC3.0 放送の胸を躍らせるような開発」の2点を指摘した。

日本回廊と呼ばれる中央ホールでは、今年も西のパナソニックから東のソニーに至るまで代表的な日本企業がブースを構えて注目を浴びた。この長い回廊で目に付いた代表的なメーカーは、パナソニック、ソニー、キヤノン、朋栄、池上通信機、富士フィルム、リーダー電子、日立国際電気だ。

創立 100 周年を迎えた **パナソニック** は、同社の 1918 年～2018 年の実績



写真2 パナソニックは、創立 100 周年を祝いながら多種多様な機器・システムを出展した。

を示す大判ポスターを正面に張り出して、4K シネマカメラ、4K スタジオカメラ、12G-SDI 対応のスイッチャー、複数の 8K 小型カメラ映像から特定の HD 映像を切り出すシステムなど、多彩な展示とデモを行っていた。4K シネマカメラの注目はバージョンアップした「AU-EVA1」で、4K スタジオカメラの人気は HDR と 4 倍速に対応した「AK-UC4000」に集まっていた。

ソニーのブースでは、4K/8K 構成の 440 インチ「クリスタル LED ディスプレイ」が目を引きいた。上映された映像のハイライトは、同社の 8K3 板式カメラシステム「UHC-8300」で撮影した 120p の HDR 映像である。カメラの展示コーナーでは、この 8K「UHC-8300」と 6K フルフレームセンサー搭載のシネアルタ「VENICE」が関心の的になっていた。新製品としては、今回 4K HDR 60p 収録のカムコーダ「PXW-Z280」と「PXW-Z190」が紹介された。一方、IP のコーナーでは、IP/12G-SDI 対応の 4K スwitchャー「XVS-9000」を中心に据え、IP ライブ映像ソリューションのデモをラスベガスとアトランタ間 3200 キロメートルを結んで実施していた。

キヤノンは、新開発の 38.1 x 20.1mm フルサイズ CMOS センサーを搭載した「EOS-C700FF」を大々的に PR した。ブースの担当者は、「5.9K シネマ RAW、4K ProRes 4:2:2 HQ 60fps の収録が可能」と売込みに余念がなかった。

朋栄は、スタジオプロダクションエリ



写真3 キヤノンのブースでは、4K UHD シネマカメラ「EOS C700FF」に注目が集まった。



写真4 朋栄は、8K スーパースローモーションカメラ「FT-ONE-SS8K」の試作機を披露して来場者の意表を突いた。



写真5 リーダー電子は、ZENシリーズの売込みに余念がなかった。

アで12G-SDI対応のビデオスイッチャー「HVS-6000」を初出展し、カメラステージエリアでは、8K スーパースローモーションカメラ「FT-ONE-SS8K」の試作機を披露して注目を集めた。カメラの発売予定を聞いて見たら「6か月後」との回答であった。その他、同社のブースでは、ルーティングスイッチャー「MFR-3000」やIPカメラ対応のマルチビューワ「MV-4300」が目についた。

**池上通信機**は、ブースの前面に「4K」と「8K」の大きな看板を掲げて、4K HDR スタジオカメラ、31インチの4K HDR モニター、小型軽量化した8K システムカメラ、NHKに納入したという8K モニターなどを出展した。10月に発売予定の4K HDR モニター「HQLM-3125X」については、「輝度1000nit、コントラスト比100万対1を実現する」と語っていた。

**富士フィルム**は、4K対応の最新のレンズ群をショーケースに並べていた。中でも、世界最高46倍ズームの4K対応ポータブルズームレンズ（参考出展）が目を引いた。

リーダー電子は、ZENシリーズの波形モニター「LV5600」とラスタライザー「LV7600」を訴求していた。両製品とも12G-SDI信号とIP信号に対応するハイブリッドタイプである。

変わったところでは、**日立国際電気**が次世代放送規格「ATSC3.0」に対応したデジタル送信機をブースに飾り、「SMPTE ST2110」に対応したVoIPの伝送デモを実施した。世界的なIPネットワーク化の潮流に乗ろうという同社の強い意気込みが感じられるデモであった。

衛星通信・衛星放送事業者が詰めた南上層ホールに出展したのは、エス・イー・エス（SES）、ユーテルサット、イスパサット、

インテルサット、AT&T、エコスター、ロシア衛星通信会社（RSCC）である。

**SES**は、Ultra HD（4K）を前面に押し出して出展した。今回、同社のブースでは、カントリーミュージック専門チャンネルの「カントリー・ネットワーク4K」が加わり、「アメリカ向けのチャンネル数が11に達した」と語っていた。他の10チャンネルのランナップを聞いて見たら「ファッション・ワン4K」「ウルトラHD1」「NASA UHD」「ネイチャービジョンTV 4K」「4Kユニバース」「ファン・ボックス4K」などを挙げていた。また、「OU Flex（Flexible Occasional Use）」の実績を示すビデオを上映して、4Kも含めた随時アップリンクサービスにも力を入れていく戦略を発表した。ハード面では、韓国のIDO IT社が製作している移動体向けの「セルフサット」アンテナを展示して売り込んでいた。実際に高速列車、バス、キャンピングカーなどに搭載され、SESの衛星を使ったブロードバンドサービスが提供されているという。

**ユーテルサット**は、4Kとトリプルプレイサービスを目玉にして出展していた。4Kについては、現在、ユーテルサット衛星を使っている3つのプラットフォームが紹介され、第1のプラットフォームは、ヨーロッパ、北アフリカ、中東向けで「Love Nature 4K」「Clubbing TV UHD」「Digiturk 4K」などが乗っているという。第2のプラットフォームは、ロシア向けで「Tricolor UHD」「Russkij Extreem」「Home 4K」など6チャンネルが提供されている。フランス向けの第3のプラットフォームに乗っているのは、「Fransat UHD」と「SFR スポーツ4K」の2チャンネルと

**イスパサット**も4Kとトリプルプレイを

前面に押し出していた。4Kについては、イスパサット衛星でヨーロッパ向けに、アマゾン衛星で南米向けにプラットフォームを構築しているという。ブースに設置されたテレビで上映されていたのは、同社が主催している「国際4Kショートフィルム・フェスティバル」の入賞作品と、スペインの国営放送局TVEが制作した4Kプログラムであった。

**インテルサット**は、今回カナダのDejeroと組んで意表を突くCellSatのデモを行った。地上の4G/LTEと衛星によるIPサービスを組み合わせることで、いつでもどこからでも映像伝送が実現するというのがウリである。

**AT&T**は、衛星放送を行っているDirecTVとストリーミング・プラットフォームを運用するDirecTV Nowの親会社である。今回、同社のブースでは、両サービスの具体的なプログラムをモニターで上映しながら盛んに売り込みを行っていた。また、車載局をブースに持ち込んで、「スポーツイベントなどの随時アップリンクサービスも請け負う態勢を整えた」と強調していた。

**エコスター**は、衛星放送事業者のDish Network、OTTプラットフォーム運用会社のSling TV、大容量衛星ブロードバンドサービス事業者のヒューズ・ネットワーク・システムズを傘下に置いている。今回、同社のブースでは、これらの多彩なサービスに加えて、西経105度に静止しているエコスター105衛星によるデジタル・シネマ配信サービスのPRが行われて関心と呼んだ。

**Naoakira Kamiya**  
衛星システム総研 代表  
メディア・ジャーナリスト